

世界の飢餓救済は倫理的義務か

樞 則 章

はじめに

義務は確かにあるが、その義務はシンガーが主張するほど強いものではないということを示したい。

一 シンガーの基本的主張

「誰が誰をどれほど助けるべきか」という問いは、実際のところ「誰が誰の何に対してどれほど、そしてどのように助けるべきか」という問いの省略表現であると考えられる。しかし、この問いはあまりにも抽象的であり、具体的な問題に即して論じられて初めて意味のある問いになりうると思われる。そこで、本稿では、世界の飢餓救済は倫理的義務か——正確に言えば、世界の裕福な人々は、絶対的貧困状態にある人々（基本的な衣食住および医療を欠いているために、生き残りぎりの状態で生きている人々）に積極的に援助する義務があるか——という問題をピーター・シンガーの議論に即して検討した上で、そのような

「この論文を書いている一九七一年一月、東ベンガルでは、食糧、住居および医療の欠如のために、人々が次々に死んでいく」。このような書き出しではじまるシンガーの「飢餓、富裕、道徳」(Singer, 1972) は、絶対的貧困状態にある人々への援助をめぐるその後の論争の契機となった論文であり、そこにおいて彼は、先進国で比較的裕福に暮らす人々（その後、シンガーは先進国にかぎらず、世界の裕福な人々と言っている）は絶対的貧困に苦しむ人々を助けるために援助団体に積極的に寄付するべ

きであり、それをしないことは不正だと主張した。すなわち、寄付は慈善ではなく、義務だと主張したのである。

シンガーのそのような主張の論拠を彼の近著『救える命』(Singer, 2009)に記された定式を用いて示せば以下のようになる。

第一前提 食糧、住居および医療の欠如による苦しみと死は悪いことである。

第二前提 悪いことが起こるのを防ぐために、(その悪いことと)ほとんど同じくらい重要なことを犠牲にしてもすむのなら、それ(=悪いことが起こるのを防ぐこと)をしないことは不正である。⁽¹⁾

第三前提 援助団体に寄付することによって、食糧、住居および医療の欠如による苦しみと死を防ぐことは、(そうした苦しみや死と)ほとんど同じくらい重要なものを犠牲にしなくても、可能である。
したがって、援助団体に寄付しなければ、不正をはたらくことになる。

この結論を否定するにはこれらの前提の少なくともひとつを否定しなければならないが、これらの前提のそれぞれに関するシンガーの基本的な主張を以下に示す。

第一前提について

シンガーは「この前提を否定する人はこれ以上読み進む必要

はない」(Singer, 1972)とか、「反対されることはないだろう」(Singer, 1979, 1991)と書いてすます一方で、黄金律を持ちだして、絶対的貧困状態にある人々の立場に身をおけば、住居および医療の欠如による苦しみと死は悪いことであることを誰も否定しえないだろうと述べてもいる(Singer, 2009)。

第二前提について

第二前提についても第一前提と同様に、ほとんど議論の余地のないものであると述べている(Singer, 1972)。なぜなら、この原理は、第一に、悪いことが起こるのを防ぐことだけを要求するのであり、よいことを促進するよう要求するのではないからであり(Singer, 1972)、第二に、道徳的観点から見ても同じだけ重要なことを犠牲にしてもすむ場合にかぎり、悪いことが起こるのを防ぐよう求めるにすぎず、したがって非帰結主義者も受け入れることができるだろうからである——この原理は、例えば重大な権利侵害がない場合に限って、悪いことを防ぐよう要求するからである(Singer, 1972, 1979, 1993) (絶対的貧困のために死に瀕した子どもの命を救うことと同じくらい道徳的に重要なことはそう多くはない、とシンガーが考えていることは言うまでもない)。

第三前提について

この前提は他の前提とは異なって事実に関する前提であるが、

もちろん、シンガーは、世界には有能で熟練した、そして効率的に援助することのできる援助団体が現に存在しているのだから、寄付することによって絶対的貧困による苦しみや死を防ぐことはできると考えている。

なお、シンガーは次のような例をあげて彼の議論全体に説得力を持たせようとしている (Singer, 1979, 1993)。あなたが浅い池の傍を歩いているときに、子どもが溺れているのを見かけた。あなたはどうするべきだろうか。もちろん、池に入って行って子どもを拾い上げるべきである。なぜなら、子どもを拾い上げれば、服は濡れ、泥だらけになるだろうが、それはたいしたことではなく、他方で、子どもが溺れ死ぬことは非常に悪いことだからである。そして、世界にはその子と同様に、死に瀕した子どもたちがたくさんいるのだから、私たちは援助団体に寄付することによって、そうした子どもたちを助けなければならぬ^(こと)。

さらに、シンガーは『実践の倫理』(Singer, 1979, 1993)において、死ぬにまかせることと殺すこととの間には本質的な違いはないのだから、人を殺してはならないことが義務であるなら、援助団体に寄付することによって、絶対的貧困状態にある人々が死なないようにすることも同様に義務であると論じている。こうしてシンガーは裕福な人々は援助団体に寄付するべきであり、寄付しなければ不正を働くことになる^(こと)と主張するのである。

二 批判

以上の主張に対しては従来から様々な批判がある。はじめに第三前提に関連する批判を取り上げ、次に第一前提と第二前提に関連する批判を取り上げる。

第三前提に関連する批判

第三前提に関連する批判として第一に挙げることができるのは、「絶対的貧困をもたらす原因や、絶対的貧困からの脱出を阻む要因を問題にしなければ、ただ援助するだけでは根本的な解決にならないのではないか、あるいはむしろ有害ではないか」ということであろう。

確かに、「飢餓、富裕、道徳」や『実践の倫理』では、絶対的貧困をもたらす原因等についての言及はない。しかし、シンガーが問題にしていることは、池で溺れる子どもの例から明らかのように、重大な悪が生じかねないときに、先ず何がなされなければならないか、ということである (シンガーが主張していることは、比較的裕福な人々は、比較的貧しい人々に寄付するべきだということではない)。そして、そのような場合に私たちが最初にしなければならないことは、もちろん、子どもを助けることであって、誰が子どもをそのような危険な状態に陥れたのかを調べたり、子どもをしっかりと見張っていないか^(こと)を叱り

つけたたり、池の周りにフェンスが作られていないことについて誰か（行政？）を非難したり、どうすれば今後子どもが池で溺れないようにすることができるか（すなわち、どのようにすれば援助の必要のない世界を実現しうるか）を考えたりすることではない。⁽³⁾

とはいえ、上の批判には正しい点もある。すなわち、「人口コントロールこそ絶対的貧困問題に対してなされるべき解決策ではないか」、「援助活動は、貧困の制度的諸原因と、そうした制度を根本的に変革する必要から人々の関心をそらせてしまうのではないか」、「金や食糧を与える援助では、貧しい人々がいままでたつても自立できないのではないか」といった批判がある。シンガーはこれらの批判のうち、人口コントロールの問題については当初から言及しているが、他の批判については近年になってようやく簡潔ながらも彼なりの回答を与えており、その要点は、「決定的に重要なことは、人々を本当に支援する方法を見つけ出すこと」であって、こうした批判によって、援助の義務がなくなるわけではないということである。ただ、シンガーも、人々を本当に支援する方法を見つけることが必ずしも容易ではないことを認めている（Singer, 2009）。

第一前提と第二前提に関連する批判

第一前提と第二前提に関連して最も問題になるのは、そもそもシンガーは第一前提と第二前提の正しさを証明しているか、

ということであろう。

すでに見たように、第一前提についてシンガーは「この前提を否定する人はこれ以上読み進む必要はない」とか、「反対されることはないだろう」と言いながら、黄金律を持ちだして、相手の立場に立つことの道徳的な必要性、ないしは普遍化可能性に訴えている。

また第二前提について、「この原理は近さや距離と無関係である。（極めて）悪いことが起こるのが、近隣の顔見知りの子どもであろうと、数千キロ離れたところにいる、名も知らぬ子どもであろうと同じである」と述べた後で、その理由として「事実の問題あるいは心理的な問題として、物理的に近く、個人的につながりのある人のほうを、そうではない人よりも援助するだろうということは事実であるとしても、道徳的な問題として、だからといって私たちがそうするべきだということにはならない。公平性、普遍化可能性、平等などの原理を受け入れるなら、離れたところにいるからといって、その人を差別することはできないからである」（Singer, 1973）と述べている。

ここから明らかなように、第一前提も第二前提も普遍化可能性に訴えて正当化されている。したがって、そうした正当化を認めない人は、見知らぬ他者の苦しみは悪ではないとか、たとえそれを悪と認めても、見知らぬ他者の苦しみをなぜ防がなければならぬのかと言うかもしれない（第一前提（誰の苦しみであれ悪である）を認めたからといって、第二前提（誰の苦しみを

防ぐべし)を認めなければならないということにはならない。

いずれにしても、第一前提と第二前提——とくに第二前提——に関連する批判は大きく二つに分けることができる。第一は、私たちは自分の家族、友人、近隣、同胞に特別の義務を負っているが、外国の見知らぬ他者に援助することは慈善ではあっても義務ではない、というものである。

これは人々の日常的な道徳的信念であるだろうが、いわゆる「関係性の倫理」を主張する人々や、コミュニタリアンもこのように主張するかもしれない。

問題は、悪いことが起こりそうな相手が誰であっても第二前提が当てはまるかということである。実際、シンガーが、相手が誰であれ第二前提が当てはまることを正当化しているかどうかは必ずしも明らかではない。シンガーは公平であることが倫理の意味の一部であると考えているようにも思われるが、見知らぬ他者——しかも、遠く離れた外国にいる他者——に生じうる害を防ぐことが義務でありうることにについては、結局のところ、池で溺れる子どもを例をいくらか変えて、子どもが他の国の子どもであった場合とか、私たちが外国でそのような状況に出会った場合とか、あるいは遠くはなれたところからモニターで監視しているときにたまたま子どもが溺れかかっているのを目撃した場合とかを持ち出して、私たちが何をすべきかを自問して考えてみる(当然、助けるべきである)(Wellman, 2005)というのが、おそらく一番説得力があるように思われる。

第一前提と第二前提に関連する批判の第二の批判は、「私たちは誰でも自分の財産に対する権利を持っているのであり、したがって援助団体に寄付するかしないかは私たち自身の判断にゆだねられている。したがって、外国の見知らぬ他者に援助することは慈善ではあっても義務ではない」というものである。これも人々の日常的な道徳的信念に基づく批判でありうるだろうが、リベタリアンならこのような批判をするだろう(Singer, 1979, 1993, 2009)。

ただ、ここでシンガーが絶対的貧困状態にある人々への援助は慈善ではなく、義務であると言うとき、それが強制可能なものとして強い意味での義務だと言っているわけではないということに注意しなければならない。したがって、寄付をしない人から強制的に取り立てるべきだとシンガーが言っているわけではない。しかし、シンガーは、たとえ財産に関する個人の権利を認めても、援助しないことが不正ではないということにはならないと言う。「週末にサーフィンをして過ごす権利があなたにはあるとしても、それでも「あなたは病気の母親の見舞いに行くべきだ」と言うことはできる。」(Singer, 2009)

シンガーはこの反論のほかに公平に訴える議論もしているが、実際のところ、この批判に対しても、すでに触れた池で溺れる子どもを例を持ちだすのが一番よい反論になるだろう。⁽⁵⁾

シンガーの道徳的要求の高さに対する批判

最後に、援助の義務に関するシンガーの道徳要求の高さに対する批判について検討する。すなわち、「シンガーが正しければ、絶対的貧困問題の解決のために、私たちは常に行動し続けなければならないのではないか」という批判である。

この批判に対するシンガーの当初の反論は、「どうしてこれが……私の主張への批判になるのだろうか。私たちの日常的な道徳意識に反するということは批判の根拠にならない」(Singer, 1972) というものであったが、「実践の倫理」の初版では、「我々の議論が立てる基準が高すぎて逆効果を招くというのは真実だろうか。このことを証拠だてるのはあまりないが、学生やそれ以外の人も論じてみて、そうかもしれないと思うようになってきた」(Singer, 1979) と述べ、「この批判から出てくるのは、このような援助の基準をおおやけに打ち出すのは望ましくないということである。つまり絶対的貧困を減少させるために最大限のことをなすには、人々が実際に援助すべきだと我々が考える額よりも低い基準を打ち出すべきだということである。もちろん我々自身——もともとの議論とそれが示すもっと高い基準を受け入れる人々——は、自分たちはおおやけに訴える基準より多くを本当は援助すべきだと知っており、そして実際に我々は他の人たちに進める額以上のものを援助するかもしれない。ここには何の矛盾もない。なぜなら、我々が自分の私的なふるまいと公的なふるまいとの両方において、絶

対的貧困を最も減少させることに努めていることになるからである」(Singer, 1979) として、裕福な人々は年収の一〇パーセントを寄付すべきだと主張するようになった⁶⁾。

私がシンガーの考えに最も違和感を覚えるのはこの点である。「実践の倫理」の初版のときは、まだシンガーはR・M・ヘアの二層理論 (two-tier theory) を採用していなかったために、ヘンリー・シジウィックの考えに従ったのかもしれない。しかし、「実践の倫理」第二版では、はっきりと二層理論に対する支持を表明しているのである。そして、私は二層理論を用いれば、この問題(援助の義務に関するシンガーの道徳的要求が高すぎるのではないかとという問題)に対して適切な答えを与えることが可能であると考えている。最後にその点について述べることにする。

三 二層理論と援助の義務

まず確認しておかなければならないことは、二層理論に立った場合、基本的な衣食住や医療が満たされている社会においては、人々に、親密な人間関係を構築し、親密な人々への愛情に基づいて行為するよう奨励すること、そして、自分自身の目標や計画を追求することを認めることが、結局のところ功利を最大化する、ということである。

その上で、次に問題になるのは、世界には絶対的貧困に苦し

む人々が多数存在するということである。このとき、二層理論に限らず、功利主義一般の立場からすれば、本来重要なことは制度の創設である。個人個人が親密な人間関係や自分の人生計画を過度に犠牲にしなくても功利を増大させることができるようにすることこそ重要なのである。そして、そのためには、裕福な各国政府の支援を受けた援助団体を創設し、必要ならそのために課税もしなければならぬし、当該地域での社会的・経済的な制度の変革も必要になるかもしれない (Shaw, 1999)。

しかし、現実にはそのような制度は存在せず、絶対的貧困の撲滅のための国際社会の取り組みも不十分なままである。ところが、その一方で、絶対的貧困に苦しむ人々に援助する民間団体が存在し、世界の裕福な人々はそうした団体に寄付することによって、絶対的貧困に苦しむ人々に多少とも援助することが可能であるということも事実である。

このとき、功利主義に批判的な人々は、功利主義では、功利を最大化するために、裕福な人々は親密な人間関係も自分の人生の目標や計画もすべて投げ打って、その日食べるのにもことかくような人々に援助団体を通じて援助するべきだということになるのではないかと行って功利主義を批判してきた。

しかし、功利主義に従ったとしても、裕福な人々がそこまでするよう要求されるわけではない。直観のレベル、すなわち日常のレベルにおいて、道徳の規則として援助することが裕福な人々に課せられるのは、小さな援助で大きな成果がもたらされ

る場合だけである。なぜなら、道徳の規則は、人々が実際にそれを受け入れて遵守し、それを破れば咎めの感情等を感じるという傾向性を持つようになって、はじめて道徳の規則として意味のあるものになるからである。したがって、人々がどのような規則を持つべきかについて功利主義的に考えるとき、人々とって遵守可能であり、かつ人々によって実際に恒常的に遵守され、しかもそうした条件の下で、実際に功利を最大化しうる規則はどのようなものであるかと考えなければならぬ。そしてその際、人々に規則を遵守する傾向性を持たせ、またその傾向性を持ち続けるようにするための心理的コスト(規則に自分が従わなかったときに罪の意識を感じるようにさせること——年収の一〇パーセントを寄付しない自分は殺人者に等しいという罪悪感等)も考慮に入れられなければならない。そうすると、裕福な人々に自分の親密な人間関係や親密な人々への愛着、基本的な人生計画を大きく損なうことを要求する規則を遵守させることはおそらく適切ではないということになるだろう。

また、たとえわずかな援助でも、機会あることに常に援助を要求する規則では、その規則を遵守する傾向性を人々にもたせることは困難であろう。なぜなら、機会あることに援助しなければならぬとしたら、どれほど過去に私が援助していても、私はそれをすべて忘れてまた援助しなければならぬからである。したがって、「この前これだけ援助したのだから、今回はちょっと勘弁してよ」と私が言うことのできる規則でなければ、

たぶん私のなかで内面化されることはないであろう (Thouker, 2000)。

これに対して、功利主義の立場からすれば、内面化すること
がどれほど困難でコストがかかろうと、功利を最大化する規則
に人々を従わせなければならぬのではないかとという反論があ
るかもしれない。しかし、実際の問題として、それに従って
れることを期待できないような規則を人々に課せば、他の規則
に対する遵守の気持ちさえ弱まってしまいうだろう。

すると、現実的に考えれば、『グロバー・バリゼーションの倫理
学』でシンガーが述べている年収の「パーセント」というのが妥
当なものであるようにも思われるが、実際には『救える命』で
シンガーが導入しているスライディング・スケール (累進課税
のように年収が増加すれば寄付するべき割合も増えるシステム) を
適用することのほうが適切であるだろう。

けれども、たいいていの人々が、寄付に関してそのような弱い
要求を人々に課すにすぎない規則にさえ従わないという現実が
あるならば、功利主義を受け入れるか、あるいは功利主義に与
していなくても、自分には援助する義務があると考えている
人々は、多くのお金と時間とエネルギーとを絶対的貧困の撲滅
のために費やさなければならぬということになるかもしれない。
実際、シンガーはそうした考えを支持しているのである。

しかし、二層理論に従えば、弱い規則によって要求される以
上のことを自分がしないからといって人は罪の意識を感じる必

要はない (また、他の人々がそうしないからといって非難するべき
でもない) ということに注意しなければならぬ。そもそも道
徳の規則が存在するのはそのためだからである。それはちよう
ど、功利主義者が、功利主義の根拠に基づいて正当化された規
則を個別の状況において破るのを自分が (あるいは他者が) 拒
否したからといって (人を殺したほうが功利が増大するという場
合に、殺人の禁止という功利主義的に正当化される規則を破るのを
自分が (あるいは他者が) 拒否したからといって)、罪の意識を感
じる (あるいは他者を批判する) べきではないのと同様である
(Shaw, 1999)。すなわち、シンガーの言うところの公的基準以
上に寄付しなかったとしても、シンガーは何ら罪の意識を感じ
る必要はないのである。もちろん、シンガーが公的基準以上の
寄付をすれば、人から称賛されるが、それはあくまでも慈
善としてである。

おわりに

本稿では、絶対的貧困状態にある人々への援助の義務に関す
るシンガーの議論を検討した。倫理は国境を越えなければなら
ない——これがシンガーの基本的な考えであることは確かであ
るが、その主張の正当化がシンガー自身においてきちんとなさ
れているかどうかは必ずしも明らかではない。けれども「溺れ
ている子ども」の例を用いることによって、シンガーの議論に

説得力を持たせることはできないかと指摘した。そしてその上で、シンガー自身が依拠しているヘアの二層理論を用いれば、シンガーが主張するほど強くはない義務として、援助の義務を擁護できることを示した。

注

- (1) ここでは「ほとんど同じくらい重要な」と表現されているが、厳密には「匹敵するほど道徳的に重要な」(傍点は極による) (Singer, 1972, 1979, 1993) である。
- (2) 「飢餓、富裕、道徳」では、この例は、第二前提の弱いバージョン「非常に悪いことを防ぐために、道徳的に重要なことを何も犠牲しなくてもすむなら、それをするべきである」の適用例として示されている。「グローバルバリエーションの倫理学」(Singer, 2002) や「救える命」では、ビーター・アングラーが提示した例 (Unger, 1996) が用いられている。
- (3) シンガーによる援助に関するロールズ批判には二つあり、ひとつは、なぜロールズは『正義論』で用いた方法を国際問題にまで拡張しようとしないうかという点であるが、もうひとつはこの点にかかわるものである。「私たちの現在の世界では、何百万もの人々が、自国がリベラルなまたは品位ある諸制度を確立し「善き秩序を持った」社会になる前に、栄養失調や貧困と関連した病気で死ぬのである」(Singer, 2002, 2004)。
- (4) 例としてシンガーはネル・ノディングズ(私たちには「アフリカの餓えた子どもに対するケアの義務はな」)

(Singer, 2002) とマッキンタイア (Singer 2004) を挙げている。また徳倫理からこのように主張する人 (Cohen, 2005) もいる。

(5) 最近になってシンガーは、貧しい発展途上国に対する裕福な先進国の加害性という観点から、リバタリアンの主張に対して反論を加えている (Singer, 2009)。なお、絶対的貧困に苦しむ人々に積極的に援助する義務が個人のレベルで存在することを否定する議論についてもシンガーは取り上げて検討し、批判しているが、ここでは省略する。

(6) 「グローバルバリエーションの倫理学」では年取の一パーセント、「救える命」では年取別にスライディング・スケールを適用し、年取一〇〇〇万円くらいで五パーセントとしている。

(7) この問題をめぐっては多くの論文があり、それらを概観し、また批判したものに、Arneson, 2004, 2009 がある。

文献

- Arneson, Richard J., 2004, "Moral Limits on the Demands of Beneficence" in Chatterjee, 2004.
- Arneson, Richard J., 2009, "What Do We Owe to Distant Needy Strangers?" in Schaler, 2009.
- Chatterjee, Deen K. (ed.) 2004, *The Ethics of Assistance: morality and the distant needs*, Cambridge University Press.
- Cohen, Andrew, 2005, "Famine Relief and Human Virtue", in Cohen and Wellman.

- Cohen, Andrew and Wellman, Christopher (eds.) 2005, *Contemporary Debates in Applied Ethics*, Blackwell Publishing.
- Hooker, Brad, 2000, *Real Code, Real World*, Oxford University Press.
- Schaler, Jeffrey A. (ed.) 2009, *Peter Singer Under Fire: the moral iconoclast faces his critics*, Open Court.
- Shaw, William, 1999, *Contemporary Ethics: taking account of utilitarianism*, Blackwell Publishers.
- Singer, Peter, 1972, "Famine, Affluence and Morality", *Philosophy & Public Affairs*, 1: 2, 229-43.
- , 1979, *Practical Ethics*, Cambridge University Press (ユーター・シンガー『実践の倫理』山内友三郎・塚崎智監訳、昭和堂、一九九一年)。
- , 1993, *Practical Ethics*, 2nd ed., Cambridge University Press (ユーター・シンガー『実践の倫理【新版】』山内友三郎・塚崎智監訳、昭和堂、一九九五年)。
- , 2002, *One World: the ethics of globalization*, Yale University Press (ユーター・シンガー『グローバル化の世界』山内友三郎・榎則章監訳、昭和堂、二〇〇五年)。
- , 2004, "Outsiders: our obligations to those beyond our borders" in Chatterjee, 2004.
- , 2009, *The Life You Can Save: acting now to end world poverty*, Random House.
- Unger, Peter, 1996, *Living High & Letting Die*, Oxford University Press.
- Wellman, Christopher, 2005, "Famine Relief: the duties we have to others", in Cohen and Wellman, 2005.
(かたぎのりあき・大阪歯科大学)